

令和元年6月16日現在

機関番号：32102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16789

研究課題名（和文）空白の5ヶ月をめぐる アメリカ遠征軍短期留学制度と戦間期文学の誕生

研究課題名（英文）On the Blank Five Months: The A.E.F. Study Abroad Program and the Birth of Interwar Literature

研究代表者

三添 篤郎 (MISOE, Atsuro)

流通経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：40734182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、第一次世界大戦直後にイギリス・フランスに駐留していたアメリカ遠征軍の若き兵士に対して、わずか5カ月間だけ提供されていた英仏短期留学制度の文学史的意義を解明することを目指したものである。調査の結果、留学を経験したアメリカ兵が、異国での教育体験を、戦後アメリカ社会で多様に活かしていたことを明らかにすることができた。最終的に、従来合衆国文学史で空白となっていた1919年2月から6月までの5カ月間を、戦間期文学の形成にとって意義ある期間として記述できるようになったことが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1919年2月から6月まで実施されていたアメリカ遠征軍英仏短期留学制度を、戦間期アメリカ文学の制度的起源として、多角的に定位できたことが、本研究の学術的意義である。また本研究は、海外留学体験が文化・思想の形成に及ぼす諸影響も、文学研究の立場から明らかにすることができた。留学を通じたグローバル人材の育成と活用が模索されている今日的な要請にも応える点で、本研究は社会的意義も持ち合わせている。

研究成果の概要（英文）：The object of my research is to elucidate the diverse cultural meanings that the American Expeditionary Forces created, soon after World War I, through their five-month study abroad program for young American soldiers stationed in either France or Britain. My research will enable us to acquire fresh insight concerning how the seed of interwar American literature was formed by its practitioners' exposures to foreign universities in France or Britain between February and June 1919. In the end, we will gain a new narrative about the five months that American literary history has long overlooked.

研究分野：アメリカ文学・文化

キーワード：戦間期文学・文化 高等教育 留学

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦は、合衆国戦間期文学の形成にどのような諸影響を及ぼしたのだろうか。サクヴァン・バーコヴィッチ編『ケンブリッジ大学版アメリカ文学史』や、エモリー・エリオット編『コロンビア米文学史』にいたるまで、第一次世界大戦とは主に「反戦文学」や「失われた世代」が誕生した契機として歴史記述されてきた。しかし、もちろん戦間期の文学史的成果はこれだけを指すわけではない。大戦後の合衆国では、「ジャズ・エイジ」「新批評」「ハーレム・ルネサンス」「ノワール文学」「グレート・ブックス運動」などが一斉に勃興する時代であった。これら個別の文学運動の歴史的生成過程に関しては、ドナルド・ピーズを筆頭とするニュー・アメリカニストらが推し進めた制度論的転回以降、精緻に解明されてきた。しかし、1920年代から30年代にかけて、なぜこれらの文学運動が一斉に開花できたのかは多くの謎を残している。戦間期文学の諸潮流を生み出した制度的起源を見定める作業は、ニュー・アメリカニストの成果を引き受けた今日のわたしたちが、解決しなければならない重要な課題となっている。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえて本研究は、戦間期文学を萌芽させた契機として、第一次大戦直後から5ヶ月間限定でアメリカ遠征軍(American Expeditionary Forces)が実施した、英仏短期留学制度に着目する。合衆国文学史の典型的な記述に倣えば、フランスに駐留していた200万人のアメリカ軍兵士は、大戦終了と同時に何事もなく本国に帰還していたことになる。しかし実情は異なる。終戦から帰国用の輸送船が到着する1919年6月まで、実に5ヶ月間の空白があり、そのあいだアフリカ系アメリカ人を含む、アメリカ軍兵士はフランスかイギリスで大学教育を受けていたのである。本留学制度を政府・軍の視点から論じた唯一の単著 Alfred D. Corneise, *Soldier-Scholars: Higher Education in the AEF, 1917-1919* (1997)が明らかにするとおり、在仏アメリカ軍兵士は終戦直後、フランスの14校、もしくはイギリスの48校のいずれかで、学術的知を吸収する貴重な機会を得ることができた。この短期留学制度を統括したのは、帰国後コロンビア大学で西洋古典教育を必修化した、通称「グレート・ブックス運動」の主導者で英文学者のジョン・アースキンである。

Corneiseはこの制度にどのような作家や批評家が関わったのかという文化的側面については論じていない。そのため申請者は平成26年以降、この制度を利用して英仏に短期留学をした作家や批評家の割り出し作業を、個々の作家の評伝や軍事史を読み込むなどして進めてきた。その過程で、ジョン・ドス・パソスはソルボンヌ大学に、新批評の創設者ジョン・クロウ・ランサムはグルノーブル大学(仏)とナンシー大学(仏)に留学していたこと、またエドモンド・ウィルソンはパリ大学への留学希望申請を出していたことが明らかとなった。また軍内部でこの留学制度の広報担当のひとりとなったのは、帰国後ノワール文学の祖となる若きジェームズ・M・ケインである。そして、この政策を足がかりにオクスフォード大学に留学した帰還兵を主人公にしたのが、F・スコット・フィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』(1925)である。のちに戦間期文学の中心的役回りをしていくこととなる若き作家・批評家たちが、戦争直後に英仏の大学で多様な知に遭遇する機会を得ていたという歴史的事実は、戦間期文学と本留学制度の深いつながりを物語っている。

わたしは、以上のような合衆国文学史の空白期間を埋める研究を、平成26年より開始している。同年にはフィッツジェラルドと本短期留学制度について多民族研究学会(於・駒沢大学)で口頭発表を行った。平成27年9月にはアメリカ国立公文書館において、本短期留学制度の関連アーカイブ同定作業を開始している。しかし、合衆国文学史記述において、空白地帯と化してきたこの5ヶ月間に、どのような作家・批評家が短期留学政策に携わり、どのような知を身につけて帰国し、戦間期文学を開花させるに至ったのかは、人種・民族・性別の区別なく今後さらに、緻密に明らかにしていかなければならない。この課題を乗り越えていったとき、わたしたちはグローバルな高等教育史から戦間期合衆国文学を捉え返す、新たな批評的視座を切り開くことができるはずである。

3. 研究の方法

(1) アーカイブ調査

本研究は、これまで全容が明らかとなつてこなかったアメリカ遠征軍英仏短期留学制度を、戦間期文学の制度的起源として、多角的に位置づけることを目的としている。そのため本研究は、アメリカ国立公文書館やアメリカ議会図書館における一次資料のアーカイブ調査が必要不可欠である。具体的に、平成28年度は留学生名簿、派遣留学先、就学科目等を特定させるための資料調査を両館で行った。平成29年度は、短期留学生の個別事例として、作家ジョン・ドス・パソスト、批評家マルカム・カウリーについて調べ上げるため、アメリカ議会図書館ならびにヴァージニア大学にて資料収集・分析を行った。最終年度は、個別事例として、英仏短期留学制度の広報に関わったのちに、ノワール文学の祖となったジェームズ・M・ケインに調査を移行し、アメリカ議会図書館で関連資料収集を行った。また、主流メディアで留学制度がどのように報道されていたのか調査することで、関連作家・批評家があらたに見つかる可能性も高いため、議会図書館で本留学制度に関する報道記事等の収集も同時に行った。

(2) テクスト分析

これらの在外調査と並行して、留学に関わった作家・批評家が、本留学制度をどのように認識し、それを個々の作品・著作でどのように表象していたのかを多角的に解析した。具体的にテキスト分析に着手したのは、F・スコット・フィッツジェラルド、ジョン・ドス・パソス、ジョン・アースキン、ジェームズ・M・ケイン、ジョン・クロウ・ランサム、マルカム・カウリーである。また下記に記すとおり、本研究を補足する意味でシャーウッド・アンダーソンとウィラ・キャザーについても、テキスト分析を精力的に進めた。

4. 研究成果

(1) アメリカ遠征軍英仏短期留学制度の詳細を解明

これまで全容がほとんど解明されてこなかったアメリカ遠征軍英仏短期留学制度についての詳細を、アーカイブ調査によって具体的に把握することができたことは、きわめて大きな成果である。とくにアメリカ軍がフランスで開校し、ジョン・アースキンが統括したポーヌ大学に関しては、すべてのスタッフ、学生、カリキュラム等を明らかにすることができた。入手資料の分析を通じて明らかとなったのは、当該カリキュラムが職業教育を推進する一方、英米文学史やシェイクスピア読解の授業も展開するなど教養主義的な一面も持っていたという事実である。本カリキュラムは、戦後のコロンビア大学で教養主義を展開していったジョン・アースキンの思想を先取りする試みであったといえる。またポーヌ大学の他に、アメリカ兵が派遣されたフランスの14校、イギリスの48校についても、可能な限り調査を進めた結果、各大学が留学生向けの新聞を定期的に発行し、異国での学生生活を積極的に後押ししていたことも確認することができた。これらの分析をふまえると、本留学制度の目的が明確となってくる。アメリカ政府・軍は本留学制度を、単に若きアメリカ兵に遊学の機会を与えるために設計したわけではなかったのである。彼らは、むしろ戦後の人材育成や高等教育政策を強く念頭に置いたうえで、それにつながるような壮大な教育実験を異国の地で実施しようとしていたのである。

(2) 留学制度が作家・批評家に与えた諸影響の析出

本留学制度と個々の戦間期作家・批評家の具体的なつながりについても解き明かすことができた。まず、F・スコット・フィッツジェラルドは、自身こそ留学はしていないものの、『偉大なるギャツビー』において主人公ギャツビーを、オクスフォード大学に短期留学した人物として造型していたことを発見した。彼と同様に、失われた世代に数え上げられるジョン・ドス・パソスは、ソルボンヌ大学留学中に現地で人類学を学んでいたことがわかった。のちにU.S.A. 3部作を筆頭とする作品群において、ドス・パソスが民衆を詳細に描いていく際、留学先で学んだ人類学的な視線や記述法が彼の文体や作風に影響を与えていた可能性は高い。また留学広報紙の編集を実質的に担っていたジェームズ・M・ケインは、戦後、自らの軍務経験と作品との影響関係について、直截に否定していた事実を明らかにすることができた。さらに、留学制度を統括したジョン・アースキンは、本留学制度をアメリカ兵に実施する際、職業教育だけでなく教養教育にも力をいれ、それを実際カリキュラムに反映していたことも判明した。フランスでのこうした教育実験があったからこそ、戦後、彼は「グレート・ブックス運動」を本格的に実施することができたと推察できる。また西洋古典を精読するというアースキンの教育理念は、留学生ジョン・クロウ・ランサムにも届いていたはずである。この読書理論を經由したからこそ、ランサムは戦後、新批評の方法論を確立することができたのではないだろうか。最後に、批評家マルカム・カウリーは、本留学制度を引き継いで、アメリカ政府が戦後に実施したAFS (American Field Services) フランス留学奨学金制度に採用され、モンペリエ大学に留学している。在仏中にカウリーが発見し、本土合衆国に向けて紹介していった米仏の新進気鋭の作家らが、のちに「失われた世代」として命名され、戦間期文学を担っていくのである。このように短期留学生らは、合衆国において作家・批評活動を展開していく際、留学先で学んだことを様々な形で活用していた。以上の個別具体的な事例研究を通じて、英仏短期留学制度と戦間期文学のつながりを多角的に実証できたことは大きな成果である。

(3) 派生した研究：同時代のアメリカ文学の検証

これらの研究を進める過程で、本留学制度と同時期に刊行されたアメリカ文学において、高等教育がどのように表象されていたのかをあらたに調査する必要性がでてきた。テキスト分析を進めた結果、従来、地方文学として区分されてきたシャーウッド・アンダーソン『ワインズバーグ、オハイオ』(1919年)や、ウィラ・キャザー『マイ・アントニーア』(1918年)らが、それぞれ各州の特定の州立大学を丹念に描いていたことが明らかとなった。アメリカ遠征軍英仏短期留学制度と同時期に書かれたこれらの小説は、白人上流階級を中心的に描くアカデミック・ノベルとは異なり、大学を市民に開かれた教育機関として描いている。その点で、これらの小説は、あらゆるアメリカ兵に高等教育の機会を与えようとしたアメリカ遠征軍英仏短期留学制度と同じ理念を共有していたといえる。この調査成果は、研究開始当初予想していなかったものであるが、これにより本短期留学制度をより複眼的な視座から理解することができるようになった。

(4) 得られた成果の位置づけとインパクト

本研究は、従来個別に論じられてきた戦間期文学の作家たちが、アメリカ遠征軍英仏短期留学制度という共通の体験を持っていたことを突き止め、その意義について多角的に考察したものである。それにより、合衆国文学史記述においてこれまで等閑視されてきた空白の5カ月間、むしろ戦間期文学の形成にとってきわめて重要な異文化接触期間であったことを、浮き彫りにすることができた。この研究成果は、戦間期文学を批評していく際の参照枠を、合衆国だけでなく、英仏の大学領域にまで拡張していく必要性を、私たちに強く認識させるものである。その点で本研究は、グローバルな視座から展開する今日のアメリカ文学研究に充分寄与するものであるといえる。また学際的な立場から進められた本研究の成果は、アメリカ文学研究のみならず、高等教育史研究や軍事史研究にもインパクトを持つものと考えることができる。

(5) 今後の展望

本研究期間に扱った作家・批評家は多岐にわたる。彼らの個別具体的な留学経験については、当初の予定どおり相当数把握することができた。これらの調査結果をふまえて、アメリカ遠征軍英仏短期留学制度の文学史的・文化史的意義について総論をまとめ上げることが、今後まず取り組まなければならない課題である。

調査の行き届かなかった点は大きく二つある。一点目は、ポーヌ大学を除くフランスの留学協定大学14校について、当時のフランス語関連資料を入手することができなかったことである。パリ大学やソルボンヌ大学で、アメリカ兵に向けてどのような講義が展開されていたのかをより具体的に解明することができれば、フランス留学が戦間期文学の形成に及ぼした影響をより精緻に立証できることは疑いえない。この点については今後さらに調査を進めていかなければならない。

もう一点、留学制度の意義を解き明かすうえで、十分に調査できなかったのが絵画・音楽についてである。発掘できた短期留学カリキュラムによると、アメリカ兵には英米仏文学だけでなく、絵画の講義・実作、さらに音楽の講義・実演といったクラスが提供されていたようである。これらの芸術関連授業では、実際に現地をフィールドワークしたり、演奏会に赴いたりする課外活動も含まれていたようである。授業を通じた強烈な異文化接触があらかじめあったからこそ、戦後合衆国はフランス文化やモダニズム文化を受け入れることができたのではないだろうか。絵画・音楽に関する方面からの調査をさらに進めることによって、アメリカ遠征軍英仏短期留学制度が、戦間期文学だけでなく、戦間期文化全体に与えた影響をより精密に解明していくことができるはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

三添篤郎「大学は出たけれどーモリル法小説としての『マイ・アントニーア』」『アメリカ文学評論』、査読無、27号、2017年、106-115頁。

〔学会発表〕(計2件)

三添篤郎「アメリカ文学を速読する」、筑波大学アメリカ文学会、2019年。

三添篤郎「オクソニアン・ギャツビーーアメリカ外征軍の英仏短期留学制度」、日本アメリカ文学会東京支部、2017年。

〔図書〕(計1件)

三添篤郎「ワインズバーグ、オハイオ州立大学」、越川芳明・杉浦悦子・鷲津浩子編『<法>と<生>から見るアメリカ文学』、悠書館、2017年、111-126頁。